

『倫理学論究』、vol. 4, no. 2 の内容

2016年11月27日、高千穂大学において日本現象学会第38回研究大会が開催され、そのプログラムのなかで「現象学的倫理学に何ができるか？——応用倫理学への挑戦——」と題する公募ワークショップが行われた。

同ワークショップでは、まず、この企画のオーガナイザーを務めた吉川孝氏が「現象学的倫理学に何ができるか？——応用倫理学への挑戦」と題して、ワークショップの趣旨と吉川氏自身の見解とを報告し、ついで、池田喬氏が「反種差別主義 VS 種の合理的配慮——動物倫理への現象学的アプローチの試み」、さらに小手川正二郎氏が「子をもつことと親になること——『家族』についての現象学的倫理学の試み」と題して報告した。そのうち、三人の報告にたいして品川哲彦が『現象学的倫理学に何ができるか？——応用倫理学への挑戦』コメント」と題してコメントを述べた。その概要については、日本現象学会から2017年に刊行された『現象学年報』33号、35-41頁に収録されている。その記事が上記のワークショップについての日本現象学会の公式な記録という意味をもつ。

しかし、三名の提題者と一名のコメンテーターは、日本現象学会大会当日の活発なやりとりをさらに継続して展開していきたいと考えていた。そのため、本号には、上記の四本の口頭発表の原稿を微細な加筆修正を除いてほぼそのまま収録することで、その場に参加しておられなかった読者にも当日の提題とそれにたいするコメントを把握できるようにしたうえで、当日とは立場を替えて、三名の提題者から品川のコメントにたいするリプライをここに掲載することにした。そして最後に、そのリプライにたいする品川のリプライを付記している。

この一連のやりとりをお読みになる方々は、現象学の若い世代の研究者が現象学と倫理学とを架橋する試みを積極的に推進している現状をまざまざと把握されるとともに、倫理学という分野からみてその試みにはまだまだ検討すべき点のあることを見出されるであろう。現象学と倫理学に関心のある方々のご清鑑を仰ぐしだいである。

本号の表紙について ——フッサールの旧居——

現象学を論じる本号の表紙には、フッサールが晩年に住んだフライブルクの住居の写真を掲げた。建物には石板がついている。「哲学者エドムント・フッサール 1859–1938 現象学の創始者が 1916–1937 年にこの家に住んでいた」。



1916 年はフッサールがゲッティンゲン大学からフライブルク大学に正教授として赴任した年である。『フッサール年代記』によれば、彼はその年の 4 月 1 日にこの住居に転居している (Karl Schumann, *Husserl-Chronik*, Martinus Nijhoff, den Haag, 1977, S.486)。ローレット通り (Lorettostraße) 40 番地にあるこの住み慣れた住居から旧市街の東側、Schloßberg すなわち城山に面したシェーネッケ通り (Schöneckestraße) 6 番地に転居したのは 1937 年 6 月のことで、フッサールは転居の混雑を避けて 6 月末から 2 週間ほど近郊の保養地ブライトナウに滞在している。ナチスの治世下、フッサールは依然として研究に専念する生活を続けていた。1937 年 5 月 12 日には、自分が委員を務めている国際哲学協働研究所 (Institut für internationale philosophische Zusammenarbeit) がフランスのヨンヌ県のポンティニーにあるポンティニー修道院で行う会議に参加する許可を——当時の状況ではおそらく聞きとどけられない許可であろうが——学長課に願い出ている。しかしながら、同年 8 月 10 日にバスタブから出るさいに転倒してバスタブの縁でけがをした

のがもとで病床に就く。明けて1938年2月7日には夜勤看護婦に「私に許されているはずの一冊の本をまだ仕上げたいと思っているんだ」と語っていた。だが4月13日になると、看護婦には「私は哲学者として生きてきた。哲学者として死のうとするつもりだ」、夫人には「神が恩寵のうちに私を受け容れてくださった。神は私が死ぬことを許された」と告げるにいたる。フッサールが亡くなったのは1938年4月27日。翌々日の火葬のさいにフライブルク大学から参列したのは、ゲルハルト・リッターただひとりであった。

彼が長く住んだこの住居からフライブルク大学へ行くには、住居から少しばかり東に歩いて、シュヴィムバート通り (Schwimmbadstraße) に出て北行する。シュヴァルツヴァルトすなわち黒い森と称する山岳地帯のへりに位置するフライブルクは街中の通りにも澄んだ水が走る水路がめぐらされているが、このシュヴィムバート通りには南に控えた市の森林公園から下りてきた小川が通りの西側に沿って流れている。しばらく進むと、バスの行き交うクローネン通り (Kronenstraße) に出て、それからすぐにフライブルクの旧市街を貫くドライザム (Dreisam) 川に出て、橋を渡り終えたところを起点として北行するヴェルトマン通り (Werthmannstraße) を少し歩くとフライブルク大学である。私が旧居を訪ねた帰りにたどった道筋はこのようで、およそ20分の道のりだった。この道を選んだのは、それが最も近道で、おそらくフッサールは大学と住居を往き来するのに寄り道などあまりしなかったのだろうと考えたからだった。旅行者の私は旧居を訪ねる往路では、いささか道草を食って二筋東にあるギュンタースタール通り (Günterstalstraße) に残る19世紀末から20世紀初頭に建てられた豪華な家並みを眺めたり、小川に沿った小路にその名を示したアムゼルヴェーク (Amselweg) の標識を見つけだしては『論理学研究』のなかの「一羽のアムゼルが飛んだ」(*Logische Untersuchungen*, II/2, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1980, S. 14) の一節を思い出したりしていた。

フライブルクの町はシュヴァルツヴァルトの森に抱かれて広がっており、ローレット通りからも南側の市の森林公園の森影が近くに見える。その景色がまた遺稿の一節を思い出させる。「部屋をあとにし、街路に出る。さらに新たな小路。村または町の反復、構成。このなじみの周囲世界はその地平が形成しなおされることによって崩壊する。あらゆる方向にさらに進んでいけば、いつも繰り返し家々の並ぶ小路が来るとはかぎらない。まばらな家々、庭が現われる——ついには開けた野が現われる。それゆえ、違った、まったく違った、なじみのないものとなるのである」(*Husserliana*, Bd. XV, S. 429)

(品川哲彦)